

コラム 38： 65歳 新春雑感

(2015. 1. 12)

この季節、朝6時30分のラジオ体操はまだ暗いですね。晴れている日は、月の光が明るくて星がとてもきれいです。西の空の高いところで、ひときわ輝いている星がいつも気になります。「あれは何という名の星かのう」と想いつつ、「そんなことどうでもいいか」とすぐに思考することを止め、いつもの体操を続けます。わざと手袋をしていない素手の冷たさで、その日の気温を感じます。外の温度は時に零下2度、暗く寒い冬の朝、一人だけの世界を楽しんでいますね。

寒の入り 月と星と 我ひとり

ラジオ体操の10分間のうちに、月と星の光が淡く薄らいできて、朝陽が昇りはじめていると感じます。1月3日の朝は平地でも雪景色となりましたが、太陽が昇ってまもなく、7時30分頃の雪景色は実にきれいでした。白い田んぼの向こうにある山並みが、朝陽の光の加減でしょうか、うすい桃色に染まっていました。あんまり綺麗なので、急いでデジカメを取りに行きました。それはほんのひと時、自然が見せてくれた「絵画」の世界のようでしたね。田んぼの見える風景は、季節が移りゆくなかで、春から夏そして秋にかけて、緑色から黄色に徐々に変化し、冬場は黒い土と白い雪になります。野鳥が飛び交い、カエルが鳴く、四季折々の変化を、私は幼少の頃から親しんできました。しかし、この自然環境は、この数年のうちに失われてゆきそうですね。



現在、私のイチゴハウスのまわりは道路工事と宅地造成が同時に行われているので、大変な状況になっています。「コラム35: 古い」の冒頭でも予告しましたが、今年3月完了をめざして急ピッチで、道路は本格的工事に入っています。家も3件が現在建築中で、これから11件建築予定と聞いています。大型のショベル車やクレーン車、ダンプトラックが行き交って、時に石を砕く轟音が響いて、ラジオも聴けません。ハウスの中が、「静かで孤独な作業場」ではなくなっていましたね。「過疎と人口減で町が消えていく」と言われている現在の社会状況を考えると、自分の住んでいる所に家が建ち、人が増えてゆくことは、喜ばなくてははいけないのかもしれません。そうは言っても、自然環境のこともみならず、農業をやる身にとっては、日照の問題や井戸水の枯渇も心配です。「いつまでイチゴ栽培をやるじゃろうか」と、不安になりますね。



我が家の＜ベリーちゃん＞については、「コラム33:ワンちゃんとの出会い」で紹介し、その後このホームページに写真でたびたび登場しています。＜彼女＞は、朝起きて、眠るまでの間、ほとんど私の側にいるのですから、今回も書かずにおれません。今もパソコンの画面に向かって私の椅子の下で、うづくまっています。＜彼女＞のお気に入りの場所は、私の膝の上。何かというに乗っかって、気持ちよさそうにすがってきます。まるでネコですね。実にカワイイです。「癒される」というんですかね。犬が一匹いるだけで、老人ホームのお年寄りが「元気」になる、という意味がわかりますよ。



ところで、この＜ベリーちゃん＞に昨年12月半ばに異変が起きました。生後9か月経ち、生理が始まったのですよ。「大人の女」になってしまったのです。いつまでも子供でいてほしいのですがね。出血の処理は、それほど大したことではなかったのですが、もう一つ問題が起きました。「犬の発情期」のことなのです。オス犬の発情期は季節で決っているものではなく、生理の始まったメス犬の匂いを嗅ぐと、いつでも「発情」するものらしいのです。それゆえ、オスを刺激して凶暴にならないように、メスを「隔離」しなくてははいけないのです。

そういうわけで、保育園(?)や美容院(!)なども出入り禁止となっていました。たとえ出会うことはなくても、匂いが残っていたらいけないらしいのですよ。なにしろ、犬の嗅覚は人の比ではないですからね。それにしても、自分の匂いだけで、オスを狂わせるとは、うちのムスメも「罪な女」です。そういえば、人間社会にも似たような女(ひと)がいますね。「セクシー女優」とか、「グラビアアイドル」とか呼ばれているようです。今の私には、どうでもいいことですがね。

待っていましたよ!「すごい男」が広島に帰ってきてくれました!勿論、あの「黒田投手」のことですよ。シーズンオフになってから、ずっとずっと「朗報」をまっていましたよ。それゆえ12月27日付の中国新聞「黒田、カープ復帰へ」「高額契約より広島愛」の見出しはウレシカット!彼は「広島に育ててもらった」という恩義を忘れないでくれたのです。メジャーリーグの米国人から見ると、「クレイジー」としか思えん行為でしょうね。そして、彼にこれだけの「決断」をさせた「広島カープ」という球団も大したものですよ。義理人情だけでは、出来ないことで、「カープに恩返しをしたい」と思わせるだけの、「心と環境」がある球団なのでしょう。「コラム31:広島カープ」でも書きましたが、これは広島人の自慢であり、誇りですね。彼の「男気」のためにも、今年のカープは「優勝」しかありません!



しかし、これからが本当は大変でしょうね。「彼の初登板はどの試合になるのか」「どこのチケットを押さえれば、彼の投球が見れるのか」と、今から注目度は抜群です。話題の「カープ女子」を含めて、今からオーバーヒートしています。彼も人の子、ボコボコに打たれることもあるでしょう。そうしたら、短気なカープファンは「クロダ！何しに帰ってきたんなら！」などと汚いヤジも飛び出しかねません。スポーツ選手は成績がすべての世界、彼も今年40歳、そんな厳しい状況も想定した上での決断なのでしょう。

(1月16日 TV 取材にて)「もう自分の球数は多く残されていない。自分の野球人生の最後はカープで投げたい。二桁勝てないようなら、区切りをつけたい」と自ら語っています。任侠映画を地で行くような「すごく格好いい行為」だけに、その分風当たりも厳しいかもしれません。そんな時に彼の心中を思い、我慢して見守りたいと思いますね。結果はともかく、こんな損得を度外視した「愚かですばらしい人生の選択」を、現実にくれたという意味で、彼の今回の行為は、それ事体が価値あることだと思いますね。

こんな話を何処かで聞いたことがあります。「米国人の1割は寝る間も惜しんで働き、米国の富のほとんどを握る富裕層となっている。残りの9割の人は、メジャーリーグの野球を楽しむことが出来れば、人生は十分に満足と考えている人たちである」。この話のどこまで本当か、真偽のほどは定かではありません。しかし、米国社会と米国人の人生観の一端を、この言葉が表現していることは確かでしょう。「たかが野球、されど野球」・・・ということでしょうか。

「イチゴとイヌ、どっちもヤネコイ事もエツとあるんじゃが、今のワシの生きがいにもなっとるんかもしれんのう。」

